

トップへ

_

NIPPONAKANE とは

日本茜について

染めワークショップ

NIPPON AKANE を扱いたい

日本茜を栽培したい

-

日本茜研究会

お問合せ

-



日本茜サミットを開催します →

NIPPON AKANE SUPPORTER

NEWS 日本茜サミットを開催します

詳しくはこちら 一

日本の本来の赤を復活させる。その為のブランド化。

私たちは、幻といわれた染草"日本茜"の復活を目指しています。

古代から近世まで高貴な色として親しまれてきた日本の「日の丸の色」日本茜。特に日本女性にとっては、万葉集でも読まれている恋焦がれる茜です。 その茜を「NIPPON AKANE」という形でブランド化し、農産物とし、植物染料として復活させ、日本を象徴する色 "JapanRed®" まで推し進めようという取り組みです。



MIENOMAKANIE 日本芸研究会

595-0811 大阪府泉北郡忠岡町忠岡北 2-1-14 かさや儀平 内 Tel: 0725-32-0162 e-mail: isgmt@sensyu.ne.jp 日本茜研究会とは

「かさや儀平」と「美し山の草木舎」が連携して起ち上げた任意団体です。





トップ / 日本茜について

日本茜について

テキストが入ります。

歴史

弥生時代(紀元前 400 年頃)

吉野ケ里遺跡から出土された透目絹の中に、一見して染色されているものが幾つかあり、 前田雨城氏らの研究グループが分光蛍光光度計による測定と解析を行った結果、日本茜 と貝紫が検出されました。これにより、赤と紫に染められた透目絹が存在したことが確 認されています。



弥生時代(200年~300年)

『魏志倭人伝』に邪馬台国の女王卑弥呼(2~3世紀)が魏の王に献上したものの一つに「絳青縑」 (赤や青の絹布)と記述があり、「絳」は「あかきねりぎぬ」即ち『茜染の絹布』であることから、 この時代にすでに日本茜で緋色を染める技法が完成していたと言えます。



飛鳥時代 (700年~710年)

文武天皇が即位した 700 年頃、唐(現在の中国)の律令制に習って日本にも中央集権国家が成立します。日本の律令制において、官人に付与する位階に相当する服色が決められていて時代により若干変化するが概ね茜色系は上位 2 位に制定されていました。

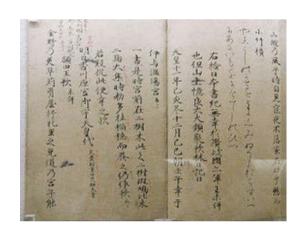
孝徳天皇の冠位に見られる「真緋」、持統天皇の「緋」、そのあとの「浅緋」なども、いずれも日本茜の根を染料として 染められたものであり、紫根で染める紫色が最高位でその次に緋色系(日本茜染め)が高い位の色に制定されていたよ うです。



奈良時代(700年~710年)

7世紀後半から8世紀後半にかけて編まれた日本に現存する最古の和歌集です。その中に、茜、茜草、赤根、安可根等で表現され人気のあった枕詞として登場します。

代表的な歌では、「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」額田王作があります。 解釈「紫草の栽培地や、天皇狩場として標(しめ)を張ったその野を行きながら、そんなことをして。野の 番人が見るではございませんか。あなたが私の気を引こうと袖を振っておられるのを。」



平安時代(905年~927年)

醍醐天皇の命により905年編集に着手,927年完した養老律令の施行細則を集大成した法典「延喜式」に、日本 茜に関する記述が残されております。

当時は染色はすべて植物による草木染めで、階位によって定められた服色があり、それを染めるための材料の数量がきっちりと示されていました。いわば、当時の標準色を染めるためのマニュアルです。なお、薪などの燃料の分量も書かれてあります。おそらく火力や温度の調節のためであると考えられます。

当時は着物用の絹反物を2反染めるのに、膨大な茜(赤根)が使われていたようです。



平安時代末期

武蔵御嶽神社所蔵の国宝「赤糸威鎧」は、著名な鎌倉武武蔵御嶽神社所蔵の国宝「赤糸威鎧」は著名な鎌倉武士である畠山重忠が奉納したと伝わる平安時代後期の、日本を代表する大鎧です。

この赤糸縅鎧の赤糸は往時の植物染料の茜で染められ今も鮮やかな赤色を保っています。しかしその技術は伝承されず、明治 36 年 (1903)

の補修では、鉱物染料で染められ、その部分は現在退色しています。 深緋(こきひ)浅緋(うすきひ)の緋は茜で染めた色を指すが、茜の赤色色素であるプルプリンを高純度に精製した色ですが、蘇芳の出現により安易に色を出せることで茜での染めが途絶えがちになりました。

江戸時代末期(1853年~1867年)

1853 年ペリー率いる米国艦隊の黒船来航、翌 1854 年には、日米和親条約締結に至りました。
1854 年(嘉永 7 年)3 月の日米和親条約調印後、日本船を外国船と区別するための標識が必要となり、日本国共通の船舶旗(日本惣船印)を制定する必要が生じました。島津斉彬が日本の船印(船に掲げる旗)として日の丸を幕府に進言したのですが、薩摩藩には日の丸を赤く染める技術がなく斉彬は苦慮しました。そこで大叔父の福岡藩藩主・黒田長溥に相談したところ、福岡藩内(現在の筑穂町)で古くから伝わる「筑前茜染め」があることを聞き、福岡藩の穂波郡山口村茜屋に家臣をつかわして古くから伝わる茜染めの技術を修得させ「日の丸」を染めさせました。その後、幕府は1854年8月4日(嘉永 7年7月11日)、「日の丸」を日本国総船印に制定しました。翌 1859年(安政6年)、幕府は縦長の幟(正確には四半旗)から横長の旗に代えて日章旗を「御国総標」にするという触れ書きを出しました。日章旗が事実上「国旗」としての地位を確立した瞬間です。

筑前茜染は、日本茜の根を染料とする染め技法で、江戸時代初期、筑穂町茜屋地区の染物師が 偶然発見し、「黒田藩の秘宝」として幕末まで守り伝えてきたものでした。



現代(2018年~)

coming soon

NIP 20 N A KAN 日 日本 芸研究会 595-0811 大阪府泉北郡忠岡町忠岡北 2-1-14 かさや儀平内

日本茜研究会とは

Copyright © 2018 NIPPON AKANE, All rights reserved

「かさや儀平」と「美し山の草木舎」が連携して起ち上げた任意団体です。





トップ / 日本茜について

日本茜について

テキストが入ります。



日本茜を使った色

茜色 (あかねいろ)



日本茜の根で染めた暗い赤色。夕暮れ時の空の形容などに良く用いられることで知られています。日本茜を染料として得る色には他に、緋色がありますが、こちらは鮮やかな赤色で茜色よりはるかに明るい色合いです。

緋(あけ)・緋色(ひいろ)



やや黄色みのある鮮やかな赤色。平安時代から用いられた伝統色名。山野に自生する多年草の日本茜を染料とし、灰汁で媒染した色。色名の「あけ」は日や火の色という意味。推古天皇の時代以来、紫に次ぐ高位の色になり、奈良時代に定められた服飾尊卑では 19 色の中で 5 番目に位置づけられました。平安時代の中頃から染法が変わり、それに伴い色調も鮮やかな赤色に、読み方も「緋色」となりました。

深緋(こきあけ)



茜染めによる暗い赤色で、「こきあけ」や「ふかひ」などと呼ばれることもあります。緋色は日本茜だけで染めますが、深緋は日本茜に紫草を上染するのでとても手間がかかった。「延喜式」では紫に次ぐ高位の朝服の色でした。

浅緋(あさあけ)



日本茜で薄く染めた緋色。わずかに黄みがかった赤色。大宝元年の服制では「直冠上四階深緋。下四階浅緋」となっており、『延喜式』においては紫、深緋、浅緋と、上から3番目に高位だった色です。一般に緋あるいは真緋といわれる色はこの浅緋を指しています。「うすきひ」、「うすあけ」ともいいます。

MIERONAKANIE 日本苦研究会

595-0811 大阪府泉北郡忠岡町忠岡北 2-1-14 かさや儀平 内Tel: 0725-32-0162 e-mail: isgmt@sensyu.ne.jp

日本茜研究会とは

「かさや儀平」と「美し山の草木舎」が連携して起ち上げた任意団体です。





トップ / 日本茜について

日本茜について

テキストが入ります。

日本茜の歴史 日本茜を使った色 日本茜関連施設

↓ ↓ ↓

日本茜関連施設

高崎市染料植物園

古くから伝えられてきた日本の染織文化やその魅力を多くの人々に伝えるために造られた植物染色のテーマパークです。園内には染料植物の道をメインに、昔から衣服などを染める原料に使われてきた代表的な染料植物が、たくさん植えられています。染色工芸館では染織品を展示し、草や木から染められるさまざまな色を見ることができます。また、草木染・藍染の講習会や染色体験では、自然の織りなす色を肌で感じ、時を超えた彩りの世界を楽しむことができます。

〒370-0865 高崎市寺尾町 2302-11

OPEN:9:00~16:30 (4月~8月までの土・日、祝日は9:00~18:00)※入園は閉園30分前まで

TEL: 027-328-6808

HP: http://www.city.takasaki.gunma.jp/docs/2017082200011/

財団法人覚誉会 繊維染色研究所

昭和57年に創設された染料植物園を備えた繊維染色研究を目的とした研究・実験施設。

初代研究所長は、京都工芸繊維大学名誉教授の相宅省吾氏で、平成 14 年まで所長として着任。

また、植物染料とその染色の研究に多大の功績を残された奈良大学名誉教授の新井清氏も新旧の研究・実験室で 10 年間、研究を続けていた。

平成 14 年には測定機器を充実させた研究室「大道」を新設し、さらに平成 16 年には、大道に隣接して第2実験室を建設しました。これにより、実験と計測の便 宜性が一層高まりました。

繊維染色研究所では、研究論文集「葆光(ほうこう)」を 1989 年より、年一回発行しています。

繊維染色研究所

〒616-8006 京都市右京区龍安寺住吉町 15-4

TEL: 075-464-0760

HP: http://www.kakuyokai.or.jp/seni/index.html

NIDEONAKANIA 日本苦研究会

595-0811 大阪府泉北郡忠岡町忠岡北 2-1-14 かさや儀平 内Tel: 0725-32-0162 e-mail: isgmt@sensyu.ne.jp

日本茜研究会とは

「かさや儀平」と「美し山の草木舎」が連携して起ち上げた任意団体です。





トップ / NIPPON AKANE を扱いたい



NIPPON AKANE

日本苦研究会

595-0811 大阪府泉北郡忠岡町忠岡北 2-1-14 かさや儀平 内 Tel: 0725-32-0162 e-mail: isgmt@sensyu.ne.jp

日本茜研究会とは

「かさや儀平」と「美し山の草木舎」が連携して起ち上げた任意団体です。

かさや儀平:https://izumi-akane-no-sato.jimdo.com/ 美し山の草木舎:https://soumokutya.jimdo.com/

Copyright © 2018 NIPPON AKANE, All rights reserved





只今工事中です

ページへのアクセスありがとうございます。 申し訳ございませんが、このページは現在製作中となっております。 完成しだい、随時更新してまいりますのでもう少々お待ちください。

NIPPON AKANE

日本茜研究会

595-0811 大阪府泉北郡忠岡町忠岡北 2-1-14 かさや儀平 内Tel: 0725-32-0162 e-mail: isgmt@sensyu.ne.jp

日本茜研究会とは

「かさや儀平」と「美し山の草木舎」が連携して起ち上げた任意団体です。

かさや儀平:https://izumi-akane-no-sato.jimdo.com/ 美し山の草木舎:https://soumokutya.jimdo.com/

Copyright © 2018 NIPPON AKANE, All rights reserved